かけた。ローマ滞在中、和田季雄宛にパリから校友会音楽部のための楽譜を送った旨の手紙を出している。十五年七月二十九日には藤田嗣治、岡見富雄、田辺孝次らとともに世話人になってパリの日本人倶楽部で第一回欧美会（欧州における本校同窓会）を開いた。その頃御厨純一と同宿であったことが御厨の手紙のなかに見える。同年夏には田辺とスペイン旅行を試み、秋から冬にかけてはイギリスに滞在した。十月中ロンドンより和田季雄宛ての手紙に「西洋の生活の方が事實上面白い筈ですから、私でもモット若い時分にやつて來たら或は居据わり度なるかも知れませんが最早四十を越してからは西洋人に豹變するべく餘りに日本人になり過ぎてる。道路が沙漠の様でも、火事が頻繁にあつても、水出があつても、暴風雨があつても、大地震があつても、矢張日本が戀しい。」と記し、文芸部宛ての手紙のなかには「渡歐後今日迄の所では、古き物、東洋の物が益佳く感ぜられ候。殊に佛蘭西の現代の趣味などは低級で日本で云へばカッポレ踊り西洋ならチャレストンのダンスの如きものと同程度だと思はれる。英國も大陸カブレのした所は好まない。國有の趣味は大に氣に入りました。」と記されている。十二月中ロンドンより校友会音楽部宛ての手紙には音楽に関することのみ記されている。翌昭和二年六月和田季雄宛ての手紙には「白和〔ベルギー、オランダ〕兩國を經て北の方ハムブルグより伯林に這入つたのが一昨日（六月五日）の晩　昨日七日森〔芳太郎〕氏の歡迎を受け以來ズットお世話になり、只今は同氏のお宅で晩餐の御馳走に預からんとして居る所です。獨逸はさすがビールも旨いが、お菓子も甘いのが有るので、毎日一遍づゝ喰べに行きます。今日はカイザア・フリドリッヒ・ミュゼアムに北歐古畫を見學、愉快且つ有益でした。四五日したら西獨逸の方に廻ります」と記されている。その後再度イギリスを旅行し、七月二十八日パリに戻ったが、石田英一の手紙によれば、八月二日夜に有志四十名による森田の送別会が開かれ、同月四日、森田はマルセーユへ向けて出発、帰国の途についた。

森田は昭和二年九月十四日、帰国届を出し復職。翌十月、文芸部は歓迎会を兼ねて森田の帰国講演会を開き、その速記録を月報第二十六巻第四号に掲載した。

その後、彼は再び文部省より欧州出張を命ぜられ、昭和四年六月から九月にかけてフランスに滞在し、古写本絵飾の調査を行い、帰国後の十二月に教授に昇格。西洋絵画史と英語の授業を担当し、同十九年の学校改革の際に退職した。同二十年、戦災で家屋、書籍等悉く失ったが、同二十一年金沢美術工芸専門学校創立の際に招かれて校長となり、同校が大学となったとき学長となった。同四十一年死去。

② 軍事教練開始

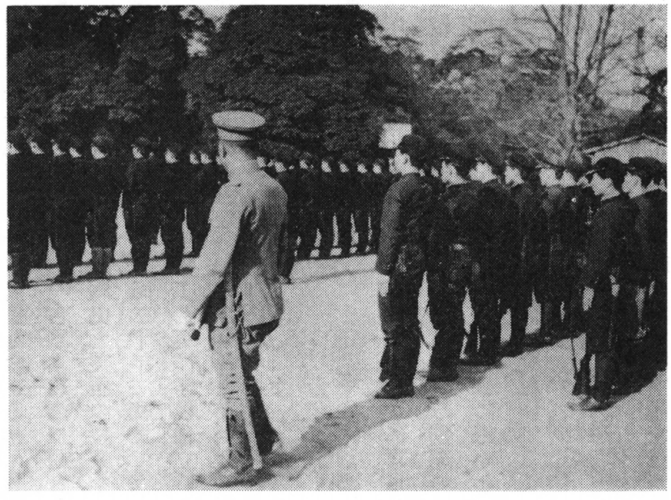
大正十四年から本校においても体操授業のなかに軍事教練が導入された。本校の体操授業を振り返ってみると、草創期の明治二十三年、本校規則整備の際に、「体操」が必修科目に定められ、生徒は入学後一、二年の間、徒手体操、兵式体操を履修することになった。それ以来「体操」の授業は行われていたわけだが、それは一般の学校と比べると随分のんびりしたものであって、体操教官羽田禎之進（明治三十四年～大正四年在職。教務掛主任兼務）なども次の

ように語っている。

體操はひどかつた、時間に行てみるとやつてゐる者は極僅かで出てゐても草の中にしやがんで見物してゐる。國民皆兵役に服する義務があり、如何なる專門の學問をする者も之を免かれられぬとすると、これを其儘放任して置けぬ、そこで私が其方に關係する事になつて、病氣の外は一切見學を許さぬことにしたです、が、學校が學校だから他のやうに烈しい運動は考へなければならない、又多少興味も付けなければならぬから海軍體操を入れたり、なるたけ同じ様な事をやらぬ様にしてやつて來たです。

（「訪問録・羽田先生」『東京美術学校校友会月報』第八巻第四号。明治四十二年十二月）

体操教官の殆どは教務、庶務掛あるいは他の教科を兼任し、しかも軍籍にある者であった。例えば右の羽田は陸軍歩兵中尉、鈴川信一（明治二十七年～昭和四年「体操」兼「日本画」「図学」担当、教務掛兼任）は同大尉、田辺孝次（大正七年～昭和十四年「体操」兼「東洋彫刻史」担当、教務掛）は同歩兵少尉、和田季雄（大正九年～昭和八年「体操」兼「塑造」担当、教務掛）は同中尉であった。一般に大正二年の「学校体操教練要目」制定以後、体操科目は予備・後備将校、下士官らが担当することにより軍事教練的色彩を濃くし、本校でも軍籍にある教官を中心として体操授業が行われたのであるが、彼らは皆本校卒業生であって、本校の教育の特色、生徒の気風によく通じていたので、その指導は穏やかであった。

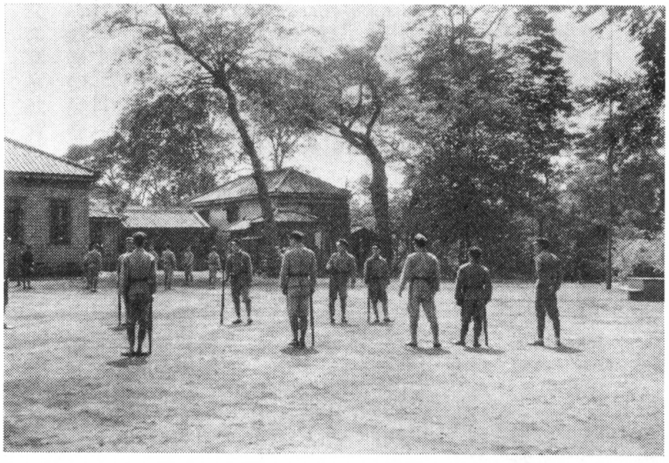


教練査閲　昭和10年（沢村吉光氏撮影）

ところが大正十四年四月十三日に「陸軍現役将校配属令」および「教練授業細目」が制定され、学校内軍事教育の大改革が行われた。それは第一次世界大戦終結後（大正七年十一月）の軍縮下における現役将校温存策ならびに次期戦争を予測しての軍事予備教育充実策によるものであったが、これによって軍当局の教育への介入が大きく前進することになった。大学以外の全ての中等以上男子諸学校で軍事教練が必修となり、現役軍人がそれを指導し、教練以外の面でも発言するようになっていったのである。本校においても同年

同月二十三日に陸軍歩兵少佐山口一二が配属将校として赴任し、軍事教練が開始され、そのため同年五月八日に規則が改正されて本科第四年次の「体操」週一時が週二時となり、写真科および図画師範科第三年次の「体操」も同様に時間が増えた。

この学校教練の本格化は既に大正六年の臨時教育審議会の建議以来、政府が検討していたもので、建議の趣旨（紀律、服従の習慣をつくり、徳育《忠愛心の養成》の手段ともなし、また、戦争を前提として強健な国民をつくり、軍事知識技能の一端を啓発するために教練を振作すべしとする。）に沿ったものであった。教練の内容は本校のような専門学校の場合は次のように規定された。



校庭における教練のスナップ　昭和10年頃（沢村吉光氏撮影）

○教材　各個教練、部隊教練、射撃、指揮法、陣中勤務、軍事講話。

○毎週教授時間数　一・五時間。

○毎年野外演習日数　四日。

大正十四年六月十九日には「陸軍現役将校配属学校査閲規程」（陸軍省令第二十四号）が制定され、教練の成果を試験する査閲を毎年一回以上行い、査閲官はその報告書を師団長に提出することとなった。

本校における教練は、先きに述べた体操授業と同様に、はじめは余程安易なものであったらしく、当時の生徒の回想によると、それは中学などで受けた教練と比べて驚くほどルーズなもので、教官もあまり軍人然とした厳めしい態度では臨まず、生徒の苦情や意見も採り入れ、生徒本位に近い授業を行い、生徒は下駄や草履をはいた者もあり、服装もまちまちで、軍事教練のイメージとはほど遠いものだったという。

野外演習の第一回は昭和二年九月に行われ、各科四年生と図画師範科三年生が下志津で四日間、本科一、二、三年生が戸山ヶ原で一日の演習を行なった。参加は志望者のみであった。演習の概要は左記のとおりである。

下志津野営演習實施報告

（各科四年、師範科三年）

指導指揮官　歩兵中佐　神保豐治郎
講　師　齋藤　幸晴

九月二十二日（木）曇
午前九時兩國驛集合　同九時二十分同驛發
同十一時頃千葉縣四ッ街道驛着　卽に隊伍を整へ野營宿泊所下志津廠舍に向ふ　參加人員五十五名　約四十分の后下志津廠舍着
歩兵第三聯隊より寢具食器等借用授受　各自持參の辨當を使ふ。
午后一時舍前に整列、野營演習の第一作業として下志津飛行學校見學。
午后六時夕食（以下食事は歩兵第三聯隊の炊事より分配を受け兵卒と同じ物を用ふ）
夜中二人宛交代にて不審番をなす等兵卒に同じ。
本日は鈴川教務主任同行親しく狀況視察、飛行學校見學を共にして夕刻歸京。

九月二十三日　朝雨后晴
雨の爲め午前の豫定を變更して新兵器（輕機關銃、重機關銃平射砲、曲射砲）及同機の操作等の見學。
午后は零時十分整列、歩兵第三聯隊第一大隊の一部學生義勇隊として大隊の對杭〔抗〕演習（攻擊）に參加　各自空包十五宛使用　中隊長には齋藤講師少隊長以下各幹部は生徒中より　此の演習に於ける行動は約四時間延長距離三里半。本日は和田助教授來場見學
夕刻歸京。

九月二十四日（土）曇
午前七時三十分廠舍出發　近衞歩兵第一聯隊の小隊戰鬪射擊見學。
同十時半歸舍　露營の設備併に飯盛炊爨を實施す。
午後は二隊に分れて小隊對杭〔抗〕演習。
夜も再び二隊に分れ夜間演習（攻擊防禦及前哨勤務）を行ふ。
本日は正木校長及鈴川教務主任來場午前午后に亘り親しく視察
特に校長の講評等あ〔ママ〕共り二氏夕刻歸京。

九月二十五日（日）曇
早朝より寢具の整頓。室内掃除諸物品の返納等をなし午前八時過廠舍出發歸京。學校へ銃器を置き正午解散。
當演習が最初の試みであるにも拘らず豫期以上の成績を擧げ演

野營演習　昭和10年頃　於習志野（沢村吉光氏撮影）

習の目的を稍完全に達成し得た事は日頃の神保中佐及齋藤講師の指導宣しきと生徒諸士の熱心な研讃に依る事勿論であるが又一つには歩兵第三聯隊將に第一大隊の好意に待つ事が多い。

尚左の日割に依つて各科一年より三年迄の野外演習を戸山ヶ原に於て施行す。

十月十日（月）各科三年（除師範科）
同十二日（水）各科二年
同十四日（金）各科一年

（『東京美術学校校友会月報』第二十六巻第四号）

なお、月報の同じ号には参加生徒の感想文も載っている。編者が意図的にしたことかも知れないが、それらによると参加者はむしろ広々とした原野を体力の限りに駆け回ったり規律に服従したりという珍しい体験を楽しんだかのように受け取れる。野外演習はこのようにして始まり、遠足に代わるものとして生徒たちに受け入れられ、参加者も年々増加した。

この外に、軍事教練の実施と併せて校内運動会が毎年秋に開催されるようになった。これは文部省示令「体育デー」によるもので、本校では第一回を大正十五年十一月五日の午後に実施し、職員、在校生、卒業生計八百人余りが集まり、種々の競技に興じた。

学校教練は結果的に見て徴兵を行い易くし、学徒出陣という異常事態にまで導いてゆく手段であった。戦時体制の強化に伴って教練の内容は厳格の度を増していった。一説には、本校のみならず各学校で順調に軍事教育が開始されたのは巧妙な軍事的手段、つまり、軍当局がそれぞれの学校の性格を考慮し、それに相応しく、また人格的にも教育者たり得る優れた上級将校を配属し、よい印象を与えるという方法をとったためと言われる。しかし、初期におけるそのような配慮も戦争の激化とともに失われ、教練教官の態度は威圧的となった。そうしたなかで、本校でも教練教官と生徒との衝突が起こった。因みに大正十三年三月に学校配属将校の座右の書とすべき『学校教練に関する参考資料』が配布された。これは同年同月陸軍士官学校における学校配属将校会同の際の講演集であるが、その中の陸軍教授大村巌講演「教育学梗概」には次のような言葉がある。

現代ノ青年カ一般ニ藝術ヲ愛シ文弱ニ流レツツアルハ決シテ健全ナル生活ニアラス、教育者ハ毅然トシテ此風ヲ矯正スルニ奮闘セサルヘカラス

こうした考えは自由と個性の尊重を校風とする本校には適合せず、もしもそれを強制すれば反発が生じたとしても無理はない。また、軍事教練は戦争反対を唱える左翼運動の側から見れば当然攻撃すべき対象であり、昭和初期の左翼活動が最も盛んだった時期には本校生のなかにも思想的な面から反発する者が居た。よく知られているのは版画家の鈴木賢二で、彼は本校入学（大正十四年）の一年後くらいからプロレタリア芸術運動に参加し、左翼出版物に漫画や挿絵を執筆していたが、昭和四年一月、校内で軍事教練反対のビラを配り、放校処分を受けるところ、父親の尽力で自主退学になった（『すゞきけんじ版画展』一九八三、鈴木より）。絵本作家八島太郎こと

岩松惇は本校入学（昭和二年）後左翼運動に傾き、同四年三月、前年に引続いての「体操」と「遠近法」不合格の廉で諭旨退学を申し渡され、説諭に応じないばかりか、担当職員を殴ったりしたので除名の処分を受けた。自著『あたらしい太陽』（一九七八年、晶文社）にはその時の情景を描いた版画に添えて「しかし、官立美術学校は、軍事教練不出席の理由で、私を放りだしてしまった。いや、陳述さえ受けつけぬ生徒監〔生徒主事の誤りか〕を一撃して、私は学校を捨てた。」という言葉が記されている。八島の場合は持ち前の奔放な気質による反発という面が大きいが、そこに左翼的思想も介在していたことも否めない。

③ 科外講義

本校では従来時折り一般を対象とする科外講義を開設したが、大正十四年度においては次の二つが開設された。

一、考古学（茶道、模様論）　大正十四年四月～同十五年三月、毎週土曜日午後一時～二時。講師今泉雄作（本校講師）。聴講者男三十人、女五人。受講費無料。

二、支那絵画史（歴代名画記、図画見聞誌、画継）　大正十四年四月～同十五年三月、毎週火曜日午前十一時～十二時。講師大村西崖（本校教授）。聴講者男二十人、女三人。受講費無料。

大正十五年四月、文部省専門学務局長より正木直彦校長に対し、「學校擴張事業ニ関スル調査ノ件」の問合わせがあった。それは「學校擴張事業ハ近時著シク發達シ貴校ニ於テモ、從来、各種ノ名稱ノ下ニ一般民衆ヲ對象トスル學校擴張事業ニ関シ施設セラレタルコト、思料セラルヽカ、今回調査上必要有之、大正十四年度中ニ於テ實施セラレタル施設ニ関シ」報告せよという内容であった。これに対して校長は「本校ニ於テハ別段學校擴張ヲ目的トシテ施設シタル事業無之只聴講者ニ特別ノ資格制限ヲ設ケサル左記〔別紙に上記二科目の実施概要が記されている。〕事業ハ稍々類似セルモノト思考セラレ候」云々と回答している。

④ 森芳太郎の在外研究

教授森芳太郎（東北帝国大学講師兼任）は大正十四年十一月、文部省より工芸化学研究のため満二年間ドイツ在留を命ぜられ、同年十二月二十日に出発した。追ってアメリカ合衆国在留をも命ぜられ、昭和三年三月十四日、研究を遂げて帰国。本校に復職し、同七年まで工芸化学および化学実験授業を担当した。

森は明治二十三年大阪市生まれ。大正三年京都帝国大学工科大学工業化学科を卒業し、翌四年から本校の嘱託教員となり、臨時写真科と製版科の物理学、化学、化学実験や工芸化学、数学等の授業を担当した。写真学に造詣が深く、光化学や写真術第三部授業も担当し、鎌田弥寿治留学中は臨時写真科主任兼理事もつとめた。『東京美術学校校友会月報』に寄稿した「真鍮の点金着色法の研究」（第二十八巻第八号）、「鉄器の燻蒸着色に就て」（第二十九巻第六号）、「古画の洗浄に就て」（第三十巻第四号）に研究の一端を窺うことが出来る。特に「古画の洗浄に就て」は大英博物館におけるスコット（Dr. Alexander Scott）を中心とする科学研究室の仕事を参観して発